

『忘れられない街である君へ』 堀山直浩

あのさ、僕のこと覚えてる？小学校2年生の夏休みにさ、君を訪れたことが有るんだよ。今、僕は十四歳だから…六年前だね。君は僕の事を覚えてないかも知れないけれど、僕は君のこと無茶苦茶覚えてる。もう六年も経ったんだなあ。そんなに経ったなんて信じられない。そのくらい君の事はいろいろ覚えてる。僕の家は毎年一回、夏休みに家族旅行するんだ。だから、別の年の夏にも他の場所をあちこち旅行しているはずなんだけど、いまだに家族の間で君の話が一番出るんだよ。不思議でしょ。書いてる僕も本当に不思議だとも思ってるんだ。君はね僕の夢にまで時々出てくる。なんでだろう。出てくる場所は、大仏さんの中の様子だったり、沢山の店屋さんの並んでいる通りだったり。そうそう！電車が降りてすぐのお店で食べたどら焼きソフトは今でも唾が出てくる美味しい思い出。お店の前で兄弟並んで食べてる様子は、その年の年

賀状用写真に棹用されたよ。お寺や神社。電車から眺められる美しい風景。少し足をのばせば輝く海があつて潮の匂いとカモメが出迎えてくれる。街歩く人は皆、笑顔でどこかうきうきしてる様に見えたなあ。君は欲張りだね。皆が望むほとんど全ての物をそろえているんだから。そんな話をしていたら「だから鎌倉は国内外問わず人気があつて訪れる人が多いんだよ」と両親に教えてもらったよ。君は人気者なんだな、そりゃそうだよなあ、と僕は妙に納得してしまった。中学校に入る年に引越して君からは遥か遠く離れて暮らすようになって、更に君とまた会いたい気持ちがあります強くなった。「また会いたい人」って言葉はよく聞くけれど、「また会いたい街」だつてあつていいと思う。正に僕の君に対する気持ちだ。あれから歴史も学校で深く学んだ。君を訪れ新発見する事は格段に増えたと思う。近い将来また、必ず君に会いに行くよ。だから楽しみに待つてくれたまえ。